

# 作業最終盤 苦難越えて

日本地下水開発（山形市、桂木宣均社長）が参加し、中央アジアのタジキスタンで展開されている地中熱を活用した冷暖房システム構築プロジェクトで、同社による熱交換用の井戸の設置作業が最終盤を迎えている。国際情勢の影響などで当初予定より遅れたが、現地で指導監督を行う同社の桂木聖彦専務（59）は「まずはほっとしている。われわれの技術が役に立てばうれしい」と話す。

U字形チューブの部品を手に、現地での作業の苦勞を語る桂木聖彦専務  
山形市



プロジェクトは、地中熱による冷暖房システムをタジキスタンで構築・普及し、同国でシステムの産業化や雇用創出などを目指す内容。秋田大が日本側代表を務め、科学技術振興機構（JST）など日本の大学や企業と、タジキスタンの政府機関などが参加する。日本地下水開発はプロジェクトの中で、井戸（地中熱交換井）2本の掘削とU字形チューブの設置作業を担当する。昨年度中に完了予定だったが、ウクライナ情勢などで日本からの資機材到着が遅れ、作業開始が今年6月にずれ込んだ。同国は、冬はマイナス20度、夏は40度を超える厳しい気候で、電

## 「地中熱で冷暖房」事業参加

## 日本地下水開発、タジキスタンに井戸



2本一組のU字形チューブを井戸の中に入れる作業  
今年7月、タジキスタン（日本地下水開発提供）

## 「山形の技術活用、誇り」

力供給も安定しない。同システムは一年を通して15度程度に保たれた地下100メートルの熱を冷暖房に生かし、エネルギー削減を図る。深さ100メートル、直径約20センチの井戸の内部にU字形のチューブを設置し、不凍液を循環させて熱を地上に取り出す。桂木専務ら4人は先月までに2回現地入りし、指導などに当たった。ヘルメットや手袋を着用しない現地作業員に困惑し、機械トラブルもあったが、先月に1本目の完成を見届けて帰国した。今月に再訪して2本目の作業完了を確認する。井戸は同国政府機関の敷地であり、ヒートポンプの設置などを経て来年夏には稼働する見込み。桂木専務は「山形の井戸掘り屋の技術が海外で活用されることは誇らしく、社員にとっても励みになる」と語った。（阿久津誠）